

ピア・トレーニング

2011/7/24 福山定例会

藤坂龍司

1. ピア・トレーニングの意義

(1) ピア・トレーニングとは

社会性の促進のため、同年代かそれに近い健常のお友達（ピア）一人ないし数人と、発達障害のある子どもが関わる場面を設定し、必要に応じて大人が介入しながら、主に遊びを通じて、適切な関わり方の訓練を行なうこと。ピア・プレイ、プレイ・デイトとも言う。

(2) ピアトレの意義

発達障害を持つ子どもが同年代の健常児の集団の中に適応していくことは、ABA早期療育の最大の目標の一つである。

そのために通常次のステップを踏む。

①家庭での大人との一対一の療育

↓

②同年代の健常児の集団（子ども教室、幼稚園など）の中に、最初は付き添い（シャドー）付きで少しずつ入れて行く。

↓

③順調なら徐々に集団の中で過ごす時間を増やし、シャドーの介入を減らして行く。家庭療育の時間も徐々に減らして行く。理想的には小学校入学までに健常児の集団にほぼ完全に適応する。小学校入学時に社会性に遅れが見られたら、シャドー付きで入学させ、家庭でも訓練を継続する。

ピアトレは①の後半から②、③にかけて、集団での適応を容易にするための補助手段として用いられる。

つまり①集団の中に入れるための事前訓練として、
あるいは②集団でのトレーニングと並行してそれを補うために用いる。

しかし③集団でのシャドーができない場合に、それに代わって子ども集団への適応を促進する手段としても有効であろう。

<ピアトレのメリット>

ピアトレのメリットは、

①保育園などの大集団と違い、1対1ないし1対数人なので、子どもが適応しやすい。また大人もピアへの働きかけや全体のコントロールが容易である。

②適当なピアを選ぶことができる。

③集団へ付き添えない場合でも、放課後や週末に実現が比較的容易である。

などである。

(3) サローズ&グロープナーの研究

Sallows & Graupner(2005)は、2才～3才半の自閉症児23人（I Q 35以上75以下）に週30～40時間の集中的なABA治療を行なったところ、うち11人（48%）が知的に正常域に達し、小学校普通学級に入学した（うち3人はシャドー付き）。Lovaas(1987)以降、最もよい成績を挙げた注目すべき研究である。

サローズらは子どもに社会性を身につけさせるため、ピアトレを重視した。特に、よくなった11人の子どもたちの場合は、ピアトレが社会性の向上のために有効だった。

11人のうち4歳時の評価で社会性が正常とされた者は、全員が4才半までに兄弟以外のピアとの週6時間以上（平均8時間）のプレイデイトを6カ月以上継続していた。

ピアの確保は親の役目だった。親は協力してくれるピアを求めて奔走した。最初は1人のピアとのプレイデイトを行なった。数カ月すると別のピアに変えた。数人のピアとの1対1のプレイデイトを経験させてから、一度に来るピアの数を数人に増やして行った。その段階になるとピアの協力を得て、「学校ごっこ」も行なった。

<Sallows & Graupner の療育の全体像>

基本的にロバースの「ミーブック」に従った。ただし嫌悪刺激は用いなかった。

ミーブック以後の研究で支持された方法（ケーゲルなど）を追加的に用いた。

①第一期

短いわかりやすい指示を出し、見てわかる課題（マッチングなど）を用い、プロンプトして正解させることで、モチベーションを上げる。一度に2, 3試行しかしない。毎回、ただちに、強力な強化子で強化する。この短い（30秒くらいの）学習と学習の間にはセラピストが子どもと遊ぶ。

②第二期

通常、受容言語を表出言語より先に教える。表出言語は音声模倣から。初めは単音、次いで単語。要求表現は出来るだけ早くから、必要なら最初はPECSのような非言語的な方法で教える。これはフラストレーションを減らし、自発的なコミュニケーションを盛んにするためである。

③第三期

名前をたくさん覚えたら、分類や文のようなより複雑な概念やスキルを教えはじめる。社会的なやりとりや協力的な遊びも家庭療育で教える。最初はセラピストと遊び、次は兄弟と、その次はピアと、毎日2時間程度遊ぶ（これは順調に伸びた子どもたち（rapid learner）の方がそれほど改善しなかった子どもたち（moderate learner）よりうまく行った）。子どもたちが社会スキルを身につけたら、健常児のプリスクールに、最初は週1, 2日（午前中のみ）から入れ始めた。最初のうちは訓練を受けたシャドー（家庭セラピーのメンバーの一人）が付き添って、先生の指示に注目させたり、園庭での遊びに参加させたり、問題点を記録して、家庭でのセラピーに役立てたりした。

④第四期

よくなった子どもたち（rapid learner）には「この子はどうして悲しいの？」などの初期の推論を教えた。また社会性スキルや会話スキルを、ロールプレイやビデオ・モデリング、ソーシャルストーリー、社会ルールに関する話し合いなどを通じて教えた。

よくなった子どもたちにはアカデミックスキルも教えた。また教室でのルールや学校での「サバイバルスキル」（全体への指示に応えることや、名前を呼ばれたら手を上げることなど）を、家庭で数人のピアの協力を得て行なう「学校ごっこ」（mock school）を通じて教えた。

2. ピア・トレーニングの実際

(1) ピアの確保

ピアは子どものモデルとならなければならないから、原則として健常児であるべき。年齢は同年代か少し年長がよいだろう。兄弟がいる場合は、兄弟からスタートしてよい。しかしいずれは兄弟以外のピアを確保することが望ましい。

ピアに家に来てもらう場合は、ピアの保護者にあらかじめ事情をきちんと説明して来てもらうこと。事情を隠したり、ピアだけと約束するのは、トラブルのもとである。

ピアにも強化子がなければいけないが、それはあらかじめ約束しないこと。さりげなく、最後にピアの好きなおやつを出したり、ピアにとって楽しい活動を、ピアトレの中に混ぜたりして強化しよう。

(2) ピアトレの目標

ピアトレの目的は、同年代の子どもの集団の中に適応できるようになることである。そのためには次のようなスキルが必要となる。

- ・ピアを模倣したり、ピアの指示に従ったりできること
- ・子ども間での社会的ルールが守れること（「勝手に相手の物を取らない」など）
- ・他害行動など、周りに嫌がられる行動を取らないこと
- ・ピアと楽しく遊べること
- ・ピアと会話ができること
- ・教室での活動に適切に従事できること（「手を上げて当てられたら答える」など）

これらの中から、あなたの子どものレベルに合わせて、適当な目標を選択し、それに合わせた活動を用意すればよい。

(3) ピアトレの内容

ピアトレの中身は、基本的に遊びと遊びを通じての会話ややり取りであるが、その他に、幼稚園や保育園での教室での活動を想定して「教室ごっこ」をしてもよい。また子どもにまだ関わり遊びのスキルが十分備わっていなければ、ピアを相手にディスクリート・トライアル（フォーマルな課題）を行ってもよいだろう。

1回のピアトレを1時間と考えて、仮に時間配分を考えてみる。

- ①自由遊び（5分）
- ②フォーマルな課題・会話練習（10分）
- ③関わり遊び（20分）
- ④学校ごっこ（15分）
- ⑤おやつ（10分）

<自由遊び>

ピアが家に来て、いきなり本格的なピアトレを始めるのではなく、まずピアと子どもをそれぞれ自由に遊ばせながら、気持ちが和むのを待つ。ただしこのときの遊びが本格的にならないように、もうすぐトレーニングを始める、ということをピアに理解させておく。

<フォーマルな課題・会話練習>

動作模倣や音声指示、目合わせ、簡単な応答など、これまで家庭で親やセラピストを相手に行なってきた課題を、ピアを相手に行なって般化を図る。子どもにまだ関わり遊びのスキルが十分でない段階で行なうといいだろう。

ただしこの課題はピアにとっては退屈なものだから、あまり長くやらないこと。

子どもにある程度会話の能力が育ってきたら、この時間に会話の練習をするとよい。大人が適当に話題を決めて子どもかピアに会話を始めるよう促す（「〇〇ちゃんに、きのうどこ行ったか、言ってごらん）。あとは必要に応じて子どもの返答をプロンプト&強化する。

一人一人に適当なものを持たせ、それを材料に情報交換型会話の練習をしてもよい（「ぼくはりんごを持ってる」「ぼくはバナナを持ってる」「りんごはね、甘くておいしいんだよ」「バナナだって、甘くておいしいよ」）

<関わり遊び>

この課題がピアトレのメインになる。遊びの種類はまず大人との間で練習しておいて、ある程度遊べるようになったものを選ぶとよい。最初からピアに選ばせると、子どもがついていけず、ピアトレの成果が上がらない。何で遊ぶかは、少なくとも最初のうち、大人が決めること。遊んでいる最中も最初のうちは大人が積極的に関わり、ピアと子どもとの間を仲立ちする。子どもの反応をプロンプトし、強化する。ピアへの強化も忘れないように。

子どもが自分でできるようになった部分から、大人の介入を徐々に減らして行く。しかし当分は、いつでも介入できる位置で待機しておくこと。

関わり遊びが苦手な子どもの場合は、大人主導でカルタ、すごろく、ボーリングゲーム、キャッチボールなど、数人で行なう楽しい活動を行なう。

<学校ごっこ>

教室を想定して、順番に名前を呼んで返事をさせたり、先生役の大人の指示に順番に答えたり、先生の出すクイズに手を上げて答えたりする。ピアトレがある程度進んでから、数人のピアを呼んで行なうとよい。ピアが一人しかいない場合は、適当に大人が加わって先生役以外に、子どもを含めて3人以上の生徒役を確保する。

この時間に、幼稚園でやるようなお絵かき、工作などの活動を行なってもよい。

（４）注意すべきこと

○子どもと同じくらい、ピアを強化すること。

○最初から自由に遊ばせないこと。大人が全体の主導権を握る。そうでないと、あっという間に子どもはほおっておかれ、ピアだけが好きなおもちゃで遊び出したり、あなたの子どもは召使扱いされたりする。

○最初から見守るのではなく、最初は子どものすぐそばについて、必要に応じてプロンプト&強化を行なう。徐々に子どものそばを離れ、見守りだけの時間を増やして行く。